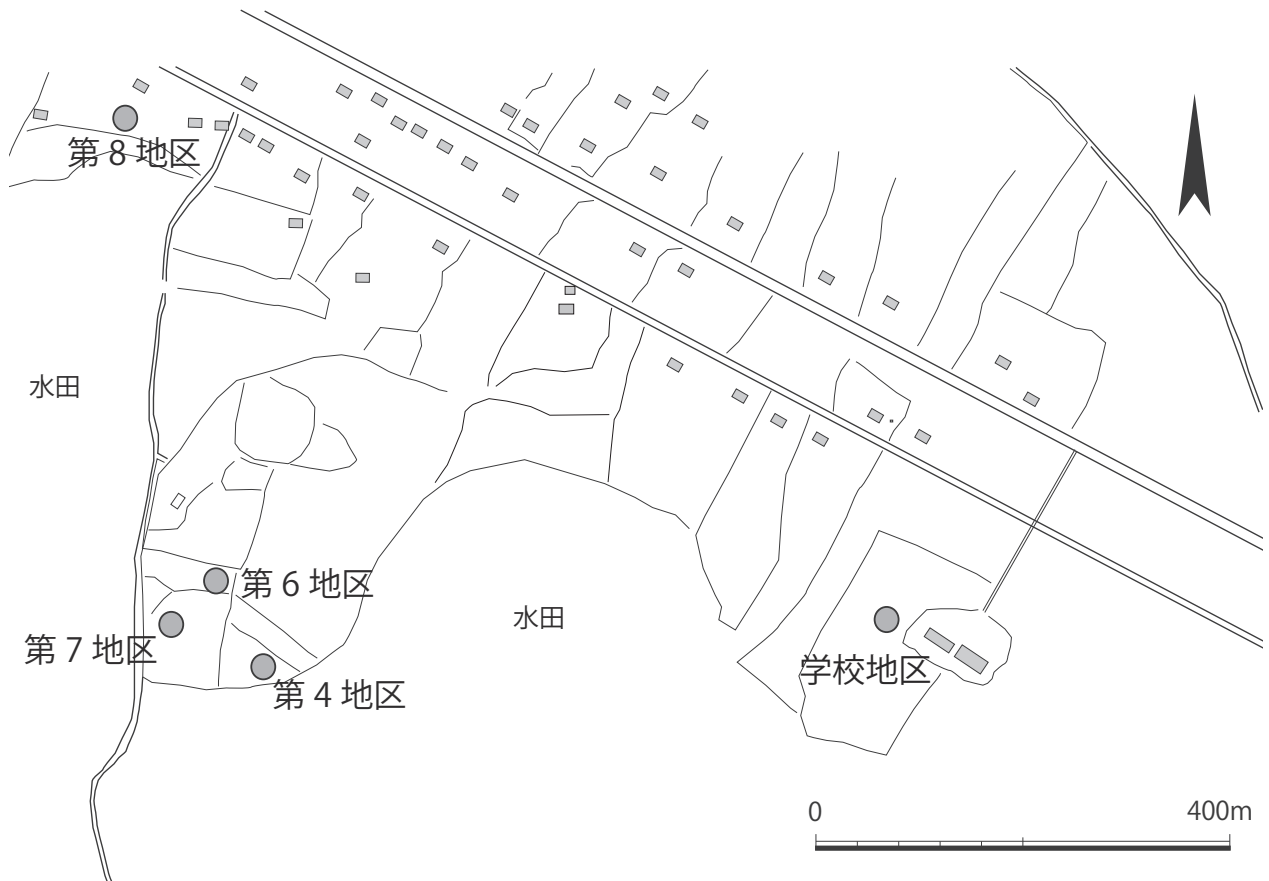


第2章 遺構

第1節 調査地点の概要

調査に際してはまず文化芸術省にもたらされた盗掘の情報から、平成22年1月に現地を踏査し、おもに盗掘によって荒らされ、陶磁器片が地上に散乱している地点を中心に、第1から第8まで8地区に分け、地上に散乱している遺物の表採調査と地形の観察をおこなった。その結果、特に遺物の出土が多く、地形的にも調査に適した第4、第6、第7、第8地区で発掘調査をおこなった。特に第6地区と第7地区では発掘調査に先立って地中レーダーによる探査をおこなった。

さらに地元での聞き取り調査によって、各地区の東側の小学校でもかつて黒褐釉甕が出土したことが知られ、そこを学校地区として地中レーダー探査と発掘調査をおこなった。各地区の位置は第17図の通りである。



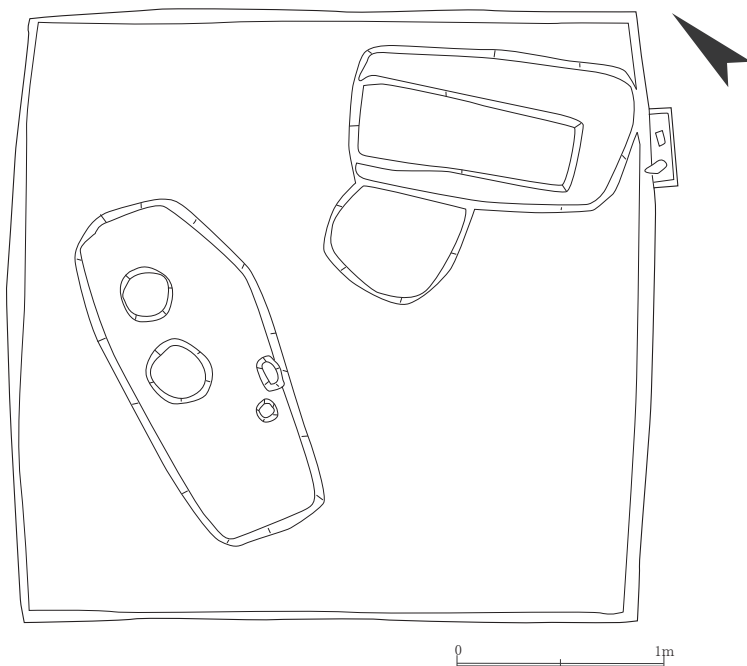
第17図 クラン・コー遺跡全体図

第2節 第4地区の遺構

第4地区では南側の道路の近くに集中して盗掘が行われ、多くの陶磁器が散乱していた。これらは木棺墓等への副葬土器と推定されたため、周辺の盗掘孔を中心として調査区を設定した。その結果3m×3mのトレンチ内から2基の墓葬が検出された。すでに激しく盗掘を受けていたため遺物はほとんど出土しなかった。墓葬1は長軸1.32m、短軸0.78mで方位は北北東—南南西方向を示す。墓壙内では木棺の痕跡が確認され、長軸1.10m、短軸0.40mを測る。墓葬2は長軸1.74m、短軸0.82mで方位は北北西—南南東方向を示す。墓葬1は木棺墓、墓葬2は盗掘範囲が広く土壙墓なのか木棺墓であったかは不明である。



第18図 第4地区遺構（西から）



第19図 第4地区遺構図

第3節 第6地区の遺構

第6地区では2カ所にトレンチを設定した。第1トレンチでは南北方向の溝が上層で発見されたが、それ以外の顕著な遺構は発見されなかった。

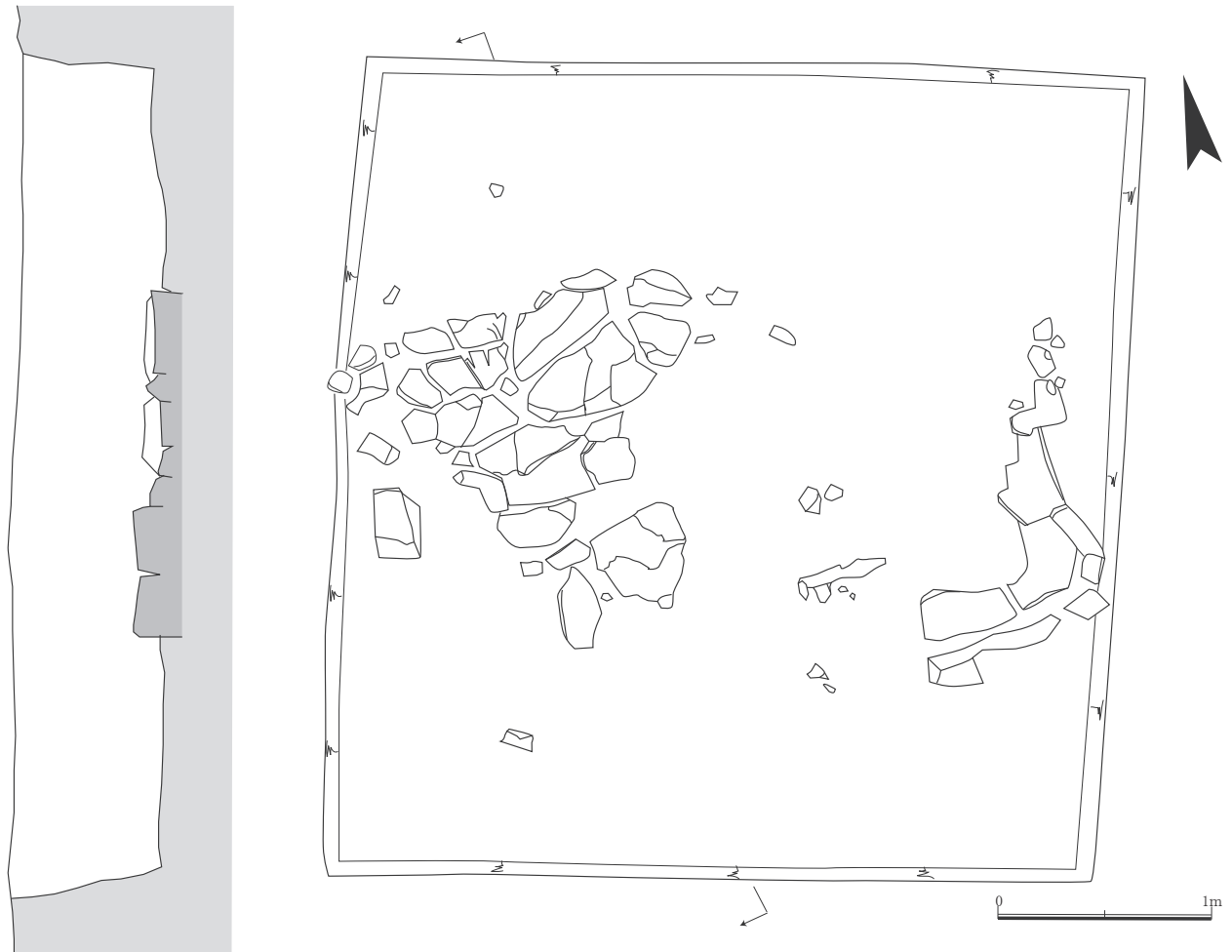
第2トレンチは地上にレンガが散乱しており、建築遺構の存在を予想して発掘をおこなった。その結果、長さ1.5m 幅1mにレンガを二段に敷き詰め、その中央に幅27cm 深さ6cmの溝を有する遺構を検出した。周辺に焼土が堆積するとともに、レンガ表面が黒く焼けていることが特徴である。周辺が墓域であることを勘案して、溝を通気口とし、レンガ上に遺体ないし棺を安置し火化したものと推定された。ただし今回の一連の調査では火葬墓と推定される遺構は検出されなかった。これまで村人が発見している黒褐釉甕が骨蔵器だとすれば、本遺構を火化地とする蓋然性が高まるものとする。



第20図 第6地区遺構（南から）



第21図 第6地区遺構（北から）

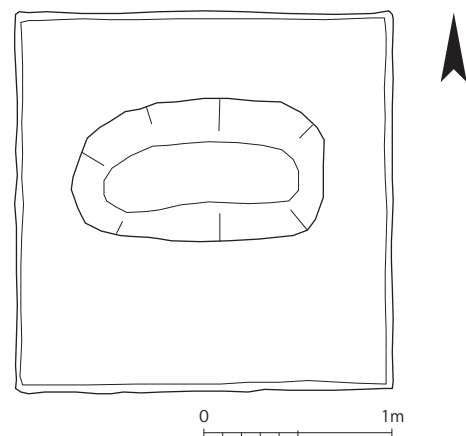
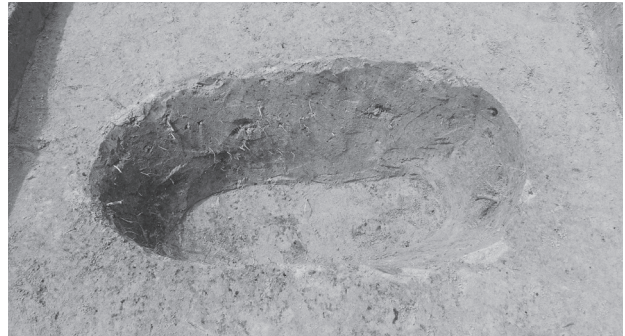


第22図 第6地区遺構図

第4節 第7地区・第8地区の遺構

第7地区でも地中レーダー探査をおこない、反応のあったところに2m×2mのトレンチを設定した。その結果、長径約60cm、短径20cmで炭化物の詰まった楕円形の土壌を検出した。

第8地区はこれまでの第4、6、7地区と異なり、集落の中の地区である。村人によれば今回の調査地区のすぐ北からは、クメール陶器黒褐釉四耳壺が出土し、人骨も伴っていたとのことである。今回はその近くの民家近くで調査をおこなった。全体の層位を確認し、墓葬を検出することはなかったが、調査をすることによって、周辺の表採をおこなうことが可能になったり、周辺村人が集めた表採遺物を調査することが可能になったりと、これまでに出土した遺物群の調査をおこなうことができた。



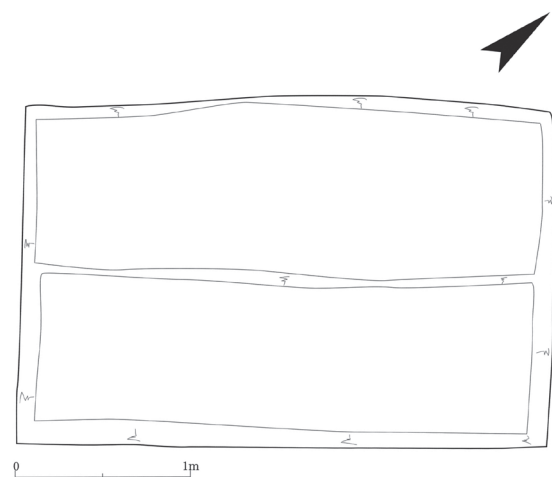
第23図 第7地区 土壌

左上：遺構全景

右上：完掘状況

左下：炭化物の堆積

右下：平面図



第24図 第8地区第1トレンチ

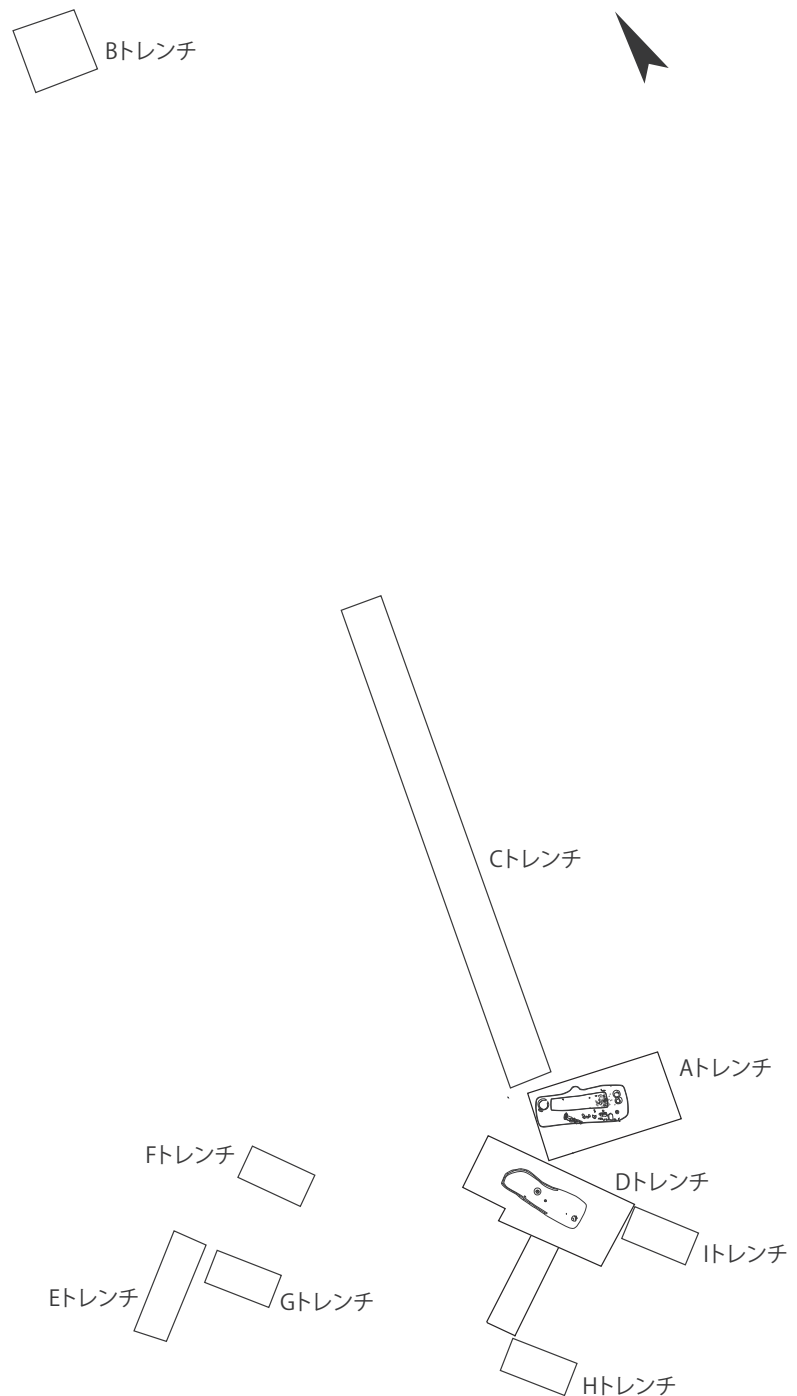
第25図 第8地区第1トレンチ

第5節 学校地区の遺構

トレンチ配置

学校地区では学校関係者から黒褐釉甕が過去に出土したとの情報を得て調査区を設定した。まず学校の西側空地に地形に沿って 50m × 20m の探査域を設定し、地中レーダー探査を実施した。その結果探査域の南側で反応があり、反応部分を中心に東西 4m 南北 2m の A トレンチを設定した。このトレンチで 1 号墓が発見されたことにより、その南北に新たなトレンチを設定した。北側には南北に長い C トレンチを設定した。本トレンチは 1 号墓周辺で他の墓葬を発見することを目的とした。1 号墓の南でも南北方向の D トレンチを設定した。同じく墓葬の発見を目的とした。幸い D トレンチで 2 号墓が発見されたことにより、2 号墓完掘のために D トレンチを東西方向に拡張して発掘をおこなった。

また C トレンチは南北に 15m 分を設定したが、時間の関係で南北 5m ごと 2 カ所のトレンチとして調査をおこなった。南 5m 分を C1 トレンチ、北 5m 分を C2 トレンチとした。



第 26 図 学校地区トレンチ配置図

1号墓

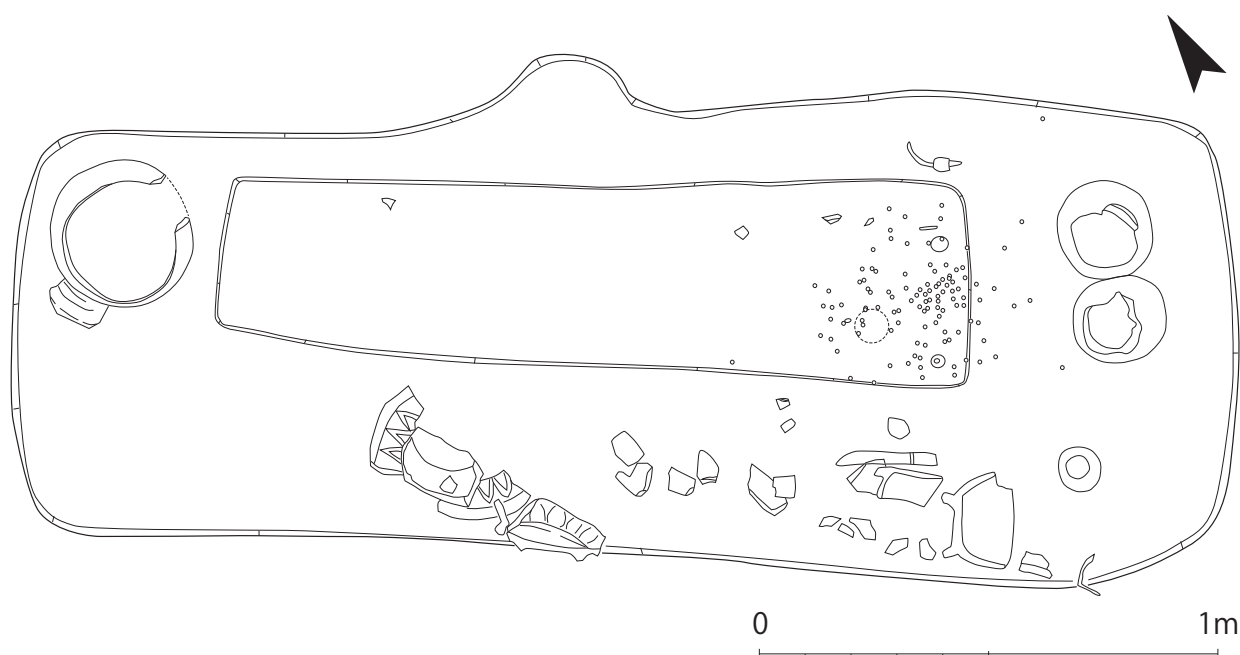
1号墓はトレンチAにおいて地表面より約0.7mの深さから検出された。規模は長軸2.66m、短軸1.20mで、南南東―北北西の方位を示す。墓壇内からは長軸1.64m、短軸0.45mの木棺痕跡が確認され、木棺墓と推定された。人骨は検出されなかったものの、副葬品の配置状況からみて頭位は東南東方向であったと考えられる。

当墓葬からは多様な副葬品が出土した。頭部推定位置の左右それぞれに亜鉛を含む銅合金の耳飾が1個体ずつ配され、頭部から頸部周辺には青色と白色のガラス製小玉が散乱した状態で合計118点が出土した。頭部推定位置の南東側には2個体の在地系土師質丸底甕が並べられ、足元にはそれらよりひとまわり大きな在地系土師質丸底甕1個体が配されていた。両腕推定位置の外側には鉄製小刀が1個体ずつ確認されていた。南側からは輸入陶磁器が集中して検出され、すべて青磁製品であった。確認されたのは、中国青磁輪花皿1点、青磁碗1点、タイ・シーサッチャナライ窯青磁盤1点・鉢1点であったが、完形で出土したのは中国青磁輪花皿1点のみである。その他は破片の状態で異なる位置から検出された。これらの輸入陶磁器の年代観は15世紀中葉から後葉に比定できるものである。当墓壇の被葬者は、墓壇規模からみて成人1名であったと考えられるが、人骨が検出されなかったため、男女の別は不明である。

遺構は木棺痕跡とその埋納土壇が検出されたことから、典型的な木棺墓と考えられる。ただ木棺痕跡周辺からは鉄釘等の出土が見られず、くり抜き式あるいは有機質の結合資材を用いた組み合わせ式の木棺であった可能性が高い。また人骨が残っていないことから、埋葬後、人骨を掘り出して二次埋葬をおこなった可能性も考えられるが、少なくとも遺骨を掘り出した時に生じる土壇の痕跡が検出されておらず、一次埋葬地であった可能性を考えておきたい。

遺物は埋葬時の状態をとどめていると思われるが、特に陶磁器類に関しては、中国青磁輪花皿1点だけが完形で、あとの青磁碗1点、タイ・シーサッチャナライ窯青磁盤1点・鉢1点の3点は破片となって棺側に副葬されていた。これら破片となって出土した3点はいずれもほぼ完形に復元され、人為的に破片化して副葬されたと考えられる。また出土した土師質丸底甕3点は頭位2点、足位1点と別置され、それぞれ内容物に差があったと考えられる。

ガラス玉は棺頭位に集中するが、棺外の埋納土壇周辺にも一部存在する。最終埋葬時に棺内の頭部に散布し、一部が棺外に飛散したと推定される。これら副葬品の出土位置と状態から、当時の埋葬習俗をある程度復元する事ができるとともに、各副葬品の時代推定にも良好な一括資料として大いに寄与する所である。



第27図 学校地区1号墓平面図



第 28 図 1 号墓検出状況（南から）



第 29 図 1 号墓検出状況（北西から）

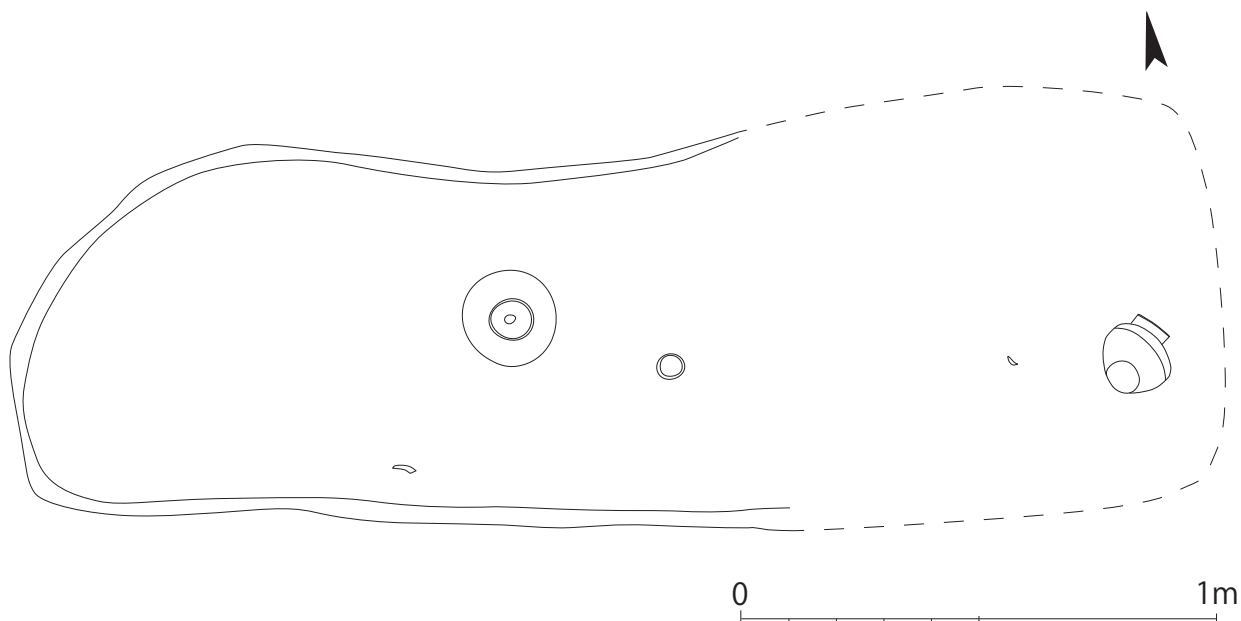
2号墓

2号墓はトレンチDから検出され、規模は長軸2.6m、短軸0.9mの長楕円形を呈し、東南東―西北西の方位を示す。当初トレンチDは東西方向の細長いトレンチを設定して発掘を始めたが、その南寄りで青花碗が発見されたため、墓壙と推定し、墓壙全体を検出するために南北方向に拡張し、最終的にT字形のトレンチとなった。青花碗周辺では墓壙がはっきりせず、拡張区で輪郭をとらえることができた。ただ墓壙は不整形で1号墓のように木棺と墓壙の区別ができなかった。2号墓は木棺を使用しない土壌への直葬と推定される。また1号墓と同様、人骨も検出されなかった。1号墓とは異なる状態で副葬品が複数出土している。

出土した副葬品は景德鎮窯産青花碗1点、青銅製碗1点、青銅製指輪1点、青銅製腕輪1点、ガラス製小玉7点、在地系土師質丸底甕1点などであった。青花碗は青銅製碗に被さり、2点とも伏せた状態で出土した。青銅製指輪は青銅製碗の中から発見された。またガラス製小玉も周辺から出土したが、1号墓に比べ出土量が少ない。これらは墓壙の東寄りから検出され、一方西寄りからは在地系土師質丸底甕が出土している。1号墓の副葬品配置状況を参考にとすると、青花碗、青銅製碗が頭位、土師質丸底甕が足元であると推定される。また墓壙の中心付近からは青銅製腕輪が出土し、被葬者の腕位置にあたると考えられる。

青花碗は内底見込に十字花文様を施したもので年代観は15世後葉から16世紀前葉に比定できると考えられることから、1号墓と2号墓に大きな年代差は認められない。

2号墓は検出面が深く遺構の残りが悪かったため、墓壙痕跡を頭位の一部で検出できていない。また1号墓のように木棺痕跡も確認できておらず、1号墓のような詳しい副葬状況は復元できていない。ただ基本的に頭位に輸入陶磁と青銅製品を置き、ガラス玉を副葬し、足位に土師質丸底甕を置くという基本構成は1号墓に類似する。また1号墓と2号墓は近いところで1.2mほどしか離れておらず、頭位をほぼそろえ東向きとする。一連の墓葬群に属するものと考えられる。人骨は遺存しないが1号墓同様、2号墓でも人骨を取り出した再葬痕跡は確認できず、土壙墓に葬られ、砂質の土壌のために人骨が残らなかったと考えられる。



第30図 2号墓平面図



第 31 図 2 号墓青花碗出土状態



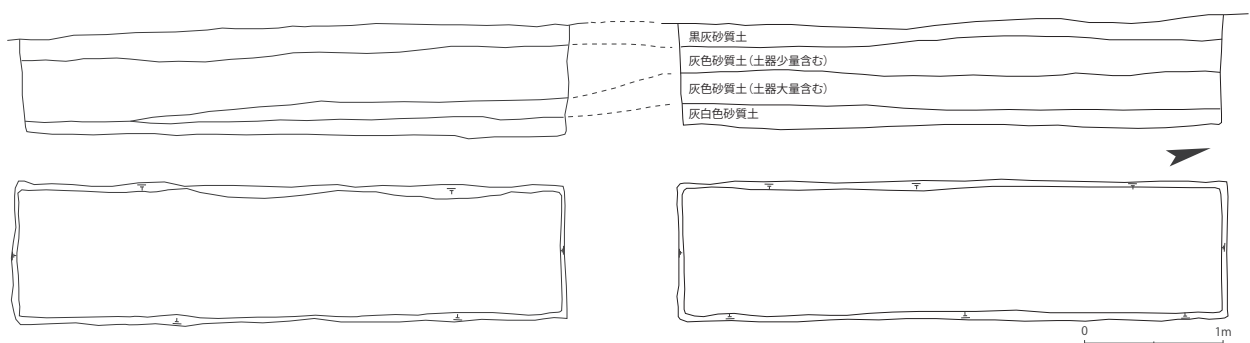
第 32 図 2 号墓青銅碗出土状態



第 33 図 2 号墓西半部検出状況

C トレンチ

トレンチ C は墓葬群の北側に南北に細長い調査区として設定した。当初は 1 号墓に続く墓葬の検出を目的としたが、墓葬は検出されなかった。しかし緩やかに南に向かって下がる土層から、大量の土師質土器片と石製と陶製の腕輪、タタキ成形時に使用する当て具が大量に出土した。遺構は検出されず、単純な堆積層が南に向かって緩やかに下がっているため、トレンチのさらに北側に土器製作工房が存在し、そこでの不良品や製作道具が廃棄されたと推定される。



第 34 図 C トレンチ平面図・土層図